

上都賀版「とちぎの星」栽培マニュアル



令和8(2026)年1月改訂

栃木県上都賀農業振興事務所
・上都賀地方農業振興協議会

「とちぎの星」の特徴

品種の特徴

- ①食味が優れ、玄米は大粒
- ②高温登熟性に優れ、外観品質が良い
- ③イネ縞葉枯病に抵抗性がある



とちぎの星		コシヒカリ
千粒重 24.0g (早植)		千粒重 21.5~ 22.0g (早植)

- ・熟期は中晩生、「コシヒカリ」より6日程度遅く「あさひの夢」より5日程度早い
- ・穂発芽性は「やや難」（「コシヒカリ」と「あさひの夢」は「難」）

「とちぎの星」の品質

タンパク質含量

玄米中タンパク質含量は5.5~6.9%（コシヒカリは5.8~6.9%）

※ 農業総合研究センター及び各農業振興事務所生育診断ほ(令和4年産)

粒厚分布

粒厚1.90mm以上が93%以上

1.85mm未満	1.85~1.9mm	1.9mm以上
3.9%	2.5%	93.6%

※ 管内展示ほの「とちぎの星」粒厚分布(令和7年産)

外観品質(1等米比率)

農産物検査で1等が93%

(令和2~6年産の県平均)

	令和 2年産	令和 3年産	令和 4年産	令和 5年産	令和 6年産	5か年平均
とちぎの星	91.4	97.9	96.8	92.9	87.7	93.3
コシヒカリ	93.6	96.1	92.4	86.0	90.7	91.8

(%)

目指す生育量・収量構成要素

適正な生育量の目安となる収量構成要素は次のとおりです

	早植	普通植
収量(kg/10a)	600	540
穂数(本/㎡)	390	340
一穂もみ数	75	75
㎡当たりもみ数	29,000	25,000
登熟歩合(%)	85	85
玄米千粒重(g)	24.0	25.0

栽培暦（早植）

じっくり型の稲づくりと適期収穫で良質米を作りましょう！

時期	4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中
作業	耕起・施肥・代かき 催芽 播種 ●—●			除草剤 移植 散布 ▲—▲ ○—○						草刈① 穂肥 △—△			草刈② 病害虫防除 ◎—◎			収穫 帯緑色籾率 10%~3% 落水 ▼—▼ ☆—☆			秋耕・ 土づくり	
生育 ステージ	出芽			活着			分けつ期			幼穂形成期			出穂期			登熟期			成熟期	
水管理	入水			移植後 5~7日 深水管理			間断かん水 (基数確保後)			生育過剰 の場合は 中干し			※低温時 深水管理			出穂期 水量確保 ※出穂後30日間の			間断かん水 落水	

※高温時は白未熟粒対策を！
かけ流しや夜間かん水で地温低下
を図り、根の活力を維持しましょう

- 堆肥の施用で地力増進
- 稲わらのすき込み
- 耕深15cm以上の確保



土づくり

- ◆わらの腐熟を促進するため、秋耕しをしましょう。
- ◆土壌診断に基づいた土づくり資材を施用し、健全な生育になるようにしましょう。

- ・地力や土壌診断に基づき適正な施肥をします。
 - 適正な生育量(収量構成要素を参考)となるよう加減します。
 - りん酸・けい酸・鉄などは不足しがちなので、土壌診断結果に基づき施用します。

土づくり資材の施用

- ・土壌中の養分を適正に保ち、根張りを良くし、収量や食味の向上につながります。

施用量の目安

《黒ボク土》

りん酸及びけい酸が不足しやすい

(例)「ようりん」:80~100kg/10a

「けいカル」:120kg/10a

《灰色低地土》

鉄分及びけい酸が不足しやすい

(例)「鉄番長」:60~120kg/10a

「けいカル」:100kg/10a

有機物の施用

- ・堆肥の施用は地力を高め、根の活性維持による登熟向上や秋落ち防止などに有効です。
- ・牛ふん堆肥の施用量は0.5~1t/10aを目安とし、前作の稲わらを持ち出した場合や他の家畜ふん堆肥を施用する場合は加減が必要です。

※連用すると地力窒素の発現量が増加するので、化学肥料を減らすことができますが、地力窒素の発現量が過剰になると食味の低下につながるため、施用量に注意します。

堆肥(現物)施用量

	施用量 (kg/10a)	有効成分量(kg)		
		窒素	リン酸	カリ
牛ふん	1,000	2.2	8.7	13.1
豚ふん	200	2.4	5.6	3.5
鶏ふん	150	2.5	6.1	4.2

※基肥窒素の一部を堆肥で充当する場合、有効成分量等を考慮し、化成肥料を減肥します。なお、堆肥の種類や副資材の量・質等により有効成分量は異なります。

施肥

- ◆食味向上のため、地力や土壌診断に基づき施肥を行いましょう。
- ◆移植が遅くなる場合、基肥を減らして倒伏等を回避し、品質向上を図りましょう。

施肥法	基肥窒素量	穂肥窒素量	穂肥の時期
分施(穂肥あり)	4.0~5.0kg/10a	2.0~3.0kg/10a	出穂の20~18日前
全量基肥 ※1	4.9~6.4kg/10a	(窒素成分の40%が緩効性)	
側条施肥 ※2	3.5~5.1kg/10a	(窒素成分の50%が緩効性)	

※1 全量基肥は、分施の2~3割減 ※2 側条施肥は、全量基肥の2~3割減

病害虫対策

- ◆出穂期までに畦畔の草刈りを2回実施し、カメムシの飛来を防ぎましょう。
- ◆カメムシ防除は、①出穂期～10日後と、②その7～10日後に薬剤散布を行いましょう。

斑点米カメムシ対策

水田周辺の除草

- ① 1回目：水稻の出穂2～3週間前
 - ② 2回目：水稻の出穂期
(1回目に刈ったイネ科雑草が出穂する前)
- } 2回の草刈り

- 注1 ①だけでは、イネ科雑草が再出穂してカメムシ類が飛来するので、効果が下がります。
②だけでは、イネ科雑草の穂に集まっていたカメムシ類を水田へ追い込み、水稻の穂を集中加害させることになります。
①② **両方の除草ができない場合は、水稻の出穂期10日前までに除草を済ませましょう。**

薬剤防除

- ① 1回目：出穂期～出穂10日後まで
 - ② 2回目：1回目から7～10日後
 - ③ 3回目：2回目から7日後（多発地） → 粒剤
- } 液剤

- 注2 ③中山間地（多発地）において、**液剤（2回）と粒剤（1回）を組み合わせた3回防除が有効です。**（3回目に粒剤散布を行うことで、登熟期後半までカメムシの幼虫の加害を抑制し、斑点米の被害を低減することができます。）

いもち病対策

葉いもち防除

- ・耐性菌の出現・拡大を防止するため、箱施薬剤は異なる系統の薬剤を年次ごとにローテーションで散布します。
- ・日頃から発生予察情報（感染好適日判定結果等）に注意し、早めに防除を実施します。

穂いもち防除

- ・水和剤・粉剤等による防除は、出穂始めから穂揃い期に実施します。
- ・本田で施用する薬剤は、箱施薬剤と異なる系統を使用します。

収穫・乾燥・調製

- ◆刈取適期は、**帯緑色籾率10%から**収穫を開始し、**3%までに終わらせましょう。**
- ◆必ず籾の色で判断し、適期に収穫を行いましょう。

適期収穫

- ・刈取適期は、必ず**帯緑色籾率**で判断してください。
- ・帯緑色籾率が10%になったら刈り始め、3%になるまでに終わらせます。
- ・葉や枝梗は緑色でも、籾は黄変し刈取適期を過ぎている場合があるので注意します。

乾燥・調製

- ・籾水分25～20%（適正水分）で収穫し、速やかに乾燥機に張り込みます。
- ・乾燥機の使用マニュアルに従い、乾燥機乾減率を0.8%/毎時以下にします。
- ※急激な乾燥（高温乾燥）や過乾燥は、胴割米の増加や食味・品質低下を招くので注意して下さい。